OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

香川生物 (Kagawa Seibutsu)(25) : 47−52, 1998.

『日本のコウモリ洞総覧』こぼれ話
−徳島県・高知県（室戸岬）の巻−

澤田　勇
〒630-8113 奈良市法蓮佐保田町1934−4

Further Note on a List of Caves of Bat Habitation in Japan
—A Case in Tokushima Pref. and Kôch Pref. (Muroto Point)—

Isamu Sawada, *1934−4, Horen-Sahoda-cho, Nara City, 630-8113 Japan*

1967年7月28日，今は亡き洞窟学の大家である山内浩先生の案内で愛媛県上浮穴郡小田町にある小田町洞（石灰洞）へ入り，キクガシラコウモリ・ユビナガコウモリの大群を眼のあたり見て驚いたのが四国でのコウモリの出会いの第1歩である。その後（1970〜1974），高知県西部及び愛媛県のコウモリ調査を行った。この間，徳島県でのコウモリ調査を計画したが，コウモリ洞の情報が容易に入手出来なかったのでそのままになっていた。

たまたま，1972年秋，木内盛郷先生（当時，徳島工業高校教諭）が徳島県下における洞窟生物について詳しいことを知り，徳島県下におけるコウモリ洞の所在について手紙を出した。その結果，最近は調査をしていないので案内は出来ないが，その昔まとめた報告書があるのでそれを送るから参考にしてほしいとの返事と近日中にコウモリを採取して送るという嬉しい便りをもらった。数日後にとどいた報告書を参考にして徳島県下のコウモリ洞調査の計画をたて，序に高知県の室戸岬まで足を延ばすことにした（図1）。

(1)※人工横井戸（阿南市大井町臼台）

※図1の調査№と一致

1973年1月14日木内先生から1頭のキクガシラコウモリのホルマリン漬けが送られてきた。添付された記録によるとこの横井戸は昔，人の手で掘られたが現在は使用されていない。奥行きが約10m，中腰で入ることが出来る。

(2) 旧導水トンネル（阿波郡市場町上喜来）

1980年11月7日，和歌山港9時20分発の南海汽船に乗船し，11時40分小松島港に着いた。ここで前もって案内をお願いしていた酒井雅博さん（愛媛大学医学部）の出迎えを受けた。彼の車で吉野川の上流に向かって192号線を走り，川島町で右折して吉野川を渡って市場町に着いた。町の西部を流れる日開谷川にかかる橋を渡ると川辺りに導水トンネルの入口が見える（写真1）。トンネルの長さは約800mで直立歩行がなんとか出来る大きな導水トンネルである。水が流れていなかったのでコウモリを探しながら奥へと向かった。調査の結果，キクガシラコウモリが6頭，ユビナガコウモリが1頭，仮冬眠の状態でさがっていた。調査を終えて徳島市にもどり，千秋閣に宿をとった。

尚，1996年8月17日森井隆三先生（善通寺西高校教諭）が調査された結果，キクガシラコウモリ約100頭，ユビナガコウモリが約10頭生息していたとの報告を受けた。

(3) 竜ノ窟（阿南市加茂町黒川）

太竜寺山の南東，標高約200mの山腹に開口する徳島県を代表する大きな鍾乳洞で，豊富な洞窟動物とコウモリの生息が報告されている（木内・吉田，1969）。本調査の計画をたてるに当たり，大きな期待を持っていた。しかし，小松島港で迎えてくれた酒井さんから鍾乳洞の

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

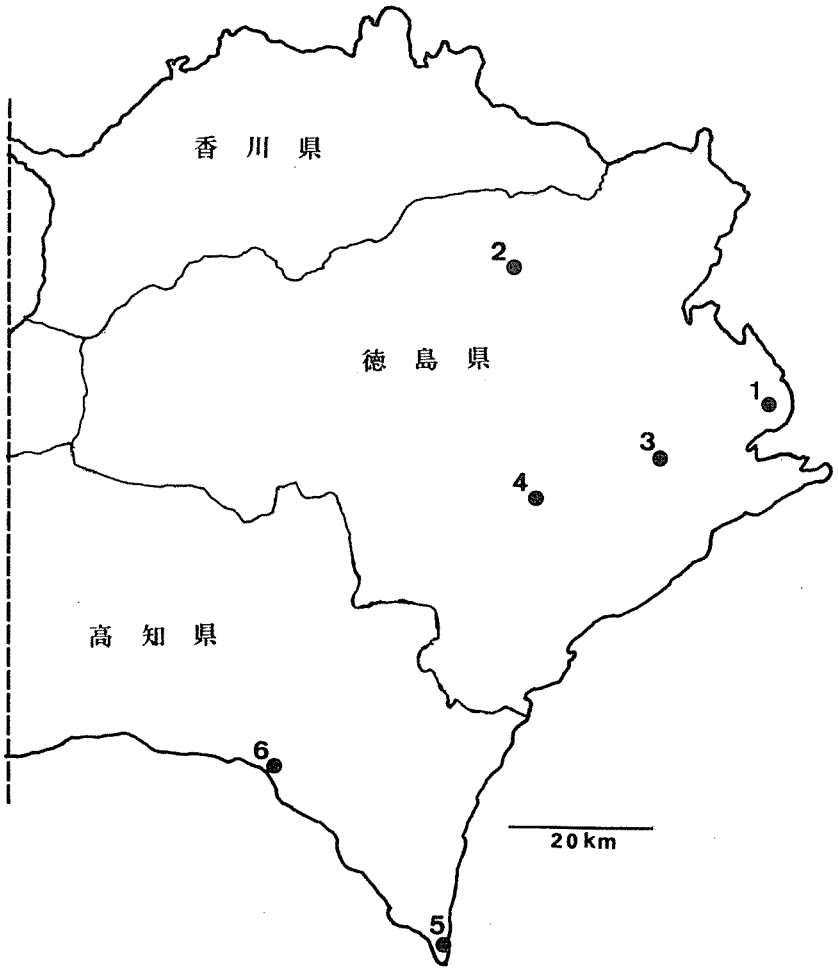

図 1. 香川県及び高知県（室戸岬）における調査地点

写真 1. 旧導水トンネルの入口

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

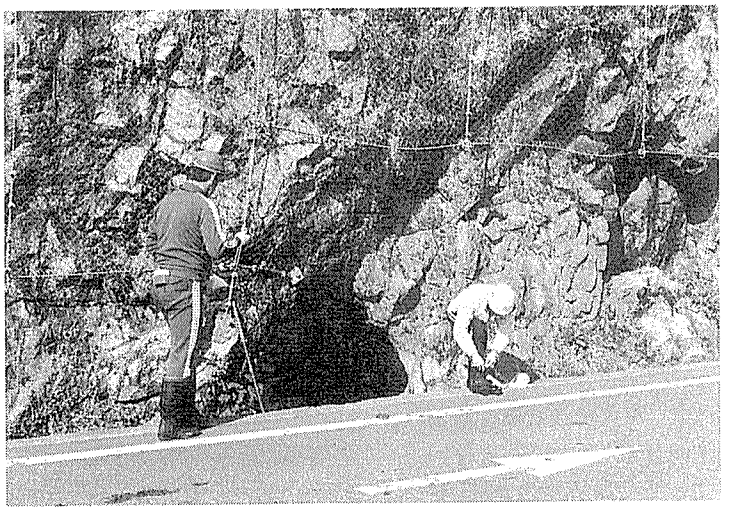

写真 2.　日店洞の入口

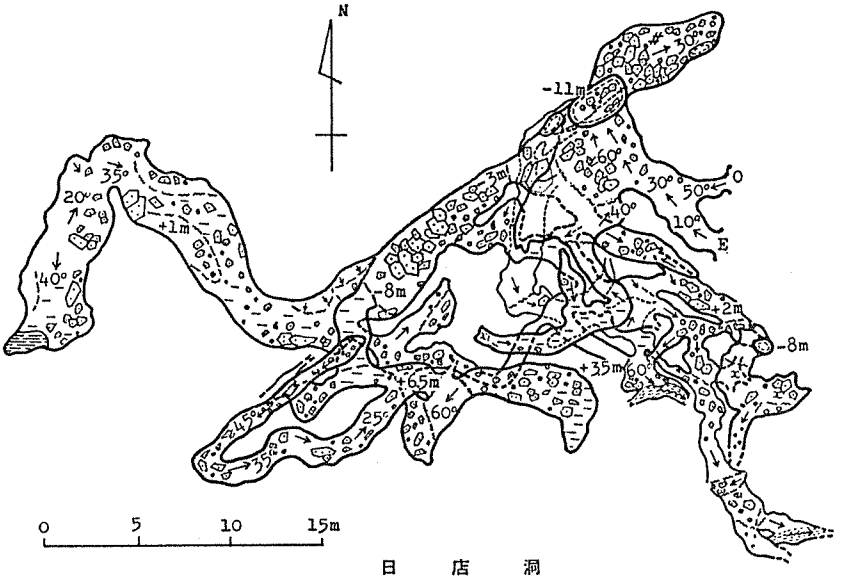

図 2.　日店洞の地形図（木内・吉田，１９６９）

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

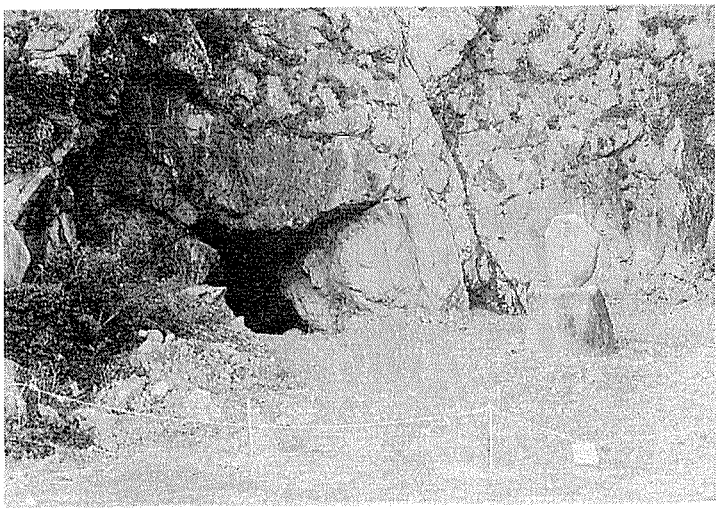

写真 3. 弘法大師が修行した小さな洞の入口

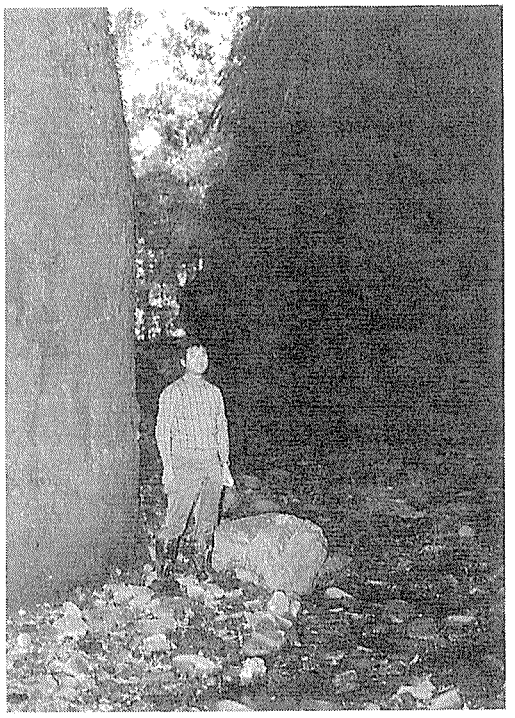

写真 4. 伊尾木洞の入口

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

写真 5. 伊尾木洞入口左上のキクガシラコウモリの生息していた側洞の入口

所有者である四国石灰株式会社が石灰岩の本格的な採掘を開始したため，入洞が禁止されたと聞かされ，調査は中止せざるを得なかった。それにしても，自然破壊が生物環境に与える影響を考えると残念の一語に尽きる。

(4) 日店(ひみせ)洞（石灰洞）（那賀郡上那賀町）

翌8日早朝，宿を出発して55号線を南下し，途中から左折して県道を通過して鷲敷町で195号線にでた。そして那賀川に沿って上那賀町に向けて走行した。

この石灰洞は1953年新道路開通工事中に発見され，195号線沿いに開口している（写真2）。国道の片側は那賀川の本流で長安口ダムの貯水池となっている。断層に沿って発達した横穴であるが上下に分岐する支洞が幾重にも重なった極めて複雑な構造をした洞窟である（図2）。道路脇に開口する洞口は狭いが，中腰で降りると大ホールがあり，その正面からやや右手にある狭い穴から下に降りることが出来る。ここまでの洞内に6頭のキクガシラコウモリの生息を確認して洞を後にした。

(5) 御蔵洞（海蝕洞）（室戸市室戸岬町）

日店洞を出て155号線をしばらく走行し，平谷で左折して193号線に入り，海部町で55号線に出た。左手に太平洋を望む景色のよい55号線を約40km走行し，14時30分頃室戸岬町に着いた。岬の突端よりわずか手前の右側に駐車場がある。車を降りて正面をみると洞口が見える。入口は狭いが高さが約4m，中に入ると天井の高さ10mの大ホールになっている。奥に弘法大師が祭られている。人が盛んに出入りするこんな洞窟にコウモリが生息するだろうかといささか疑問に思いながら高い天井にライトを照射すると最も高いと思われる天井の岩の割れ目に約100頭のキクガシラコウモリがコロニーをなして暇冬眠していたのには驚いた。さらに入口の数m右側の岩盤に弘法大師が修行した小さな洞窟の入口がみられた（写真3）。中に入ってみると1頭のキクガシラコウモリがひっそりと冬眠していた。17時頃調査を終了して，山手で太平洋を望む高台にある国民宿舎むろとに宿泊した。宿舎の窓からみた夕日のすばらしさが眼に浮かぶ。

(6) 伊尾木洞（海蝕洞）（安芸市伊尾木町）

翌9日8時，宿舎を出発して安芸市に向かう。左手に土佐湾を望む55号線を約45km走行し，9時40分頃安芸市の市街地の手前にある伊尾木町に着く。道路端に車を止め，人家の間の狭い道を進むと伊尾木洞が現れた。中に入ってみると

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

洞窟というイメージはなく，処々天井が落ちた天然橋の連続した洞窟である。天井は10mと高く（写真４），奥行は約15mでうっそうとした竹林に出て終わっている。よく調べると中ほどの天然橋のやや暗い天井の岩の凹みにユビナガコウモリが50～100頭コロニーをつくってさがっていた。調査を終えて外に出て洞口をふりかえると洞口の左側の高さ約３ｍの岩の影に小さな洞口らしきものが見える（写真５）。酒井さんがよじ登ってみると簡単に入れるような洞ではないことがわかったが，無理して腹ばいになって侵入すると天井の低い奥行４～５ｍの浅い洞で天井にキクガシラコウモリが８頭冬眠しているのを確認した。正午過ぎ，調査を終了し，高知空港15時40分発のYS11に乗り，16時30分大阪空港に着陸して今回の調査を無事終了した。

ま と め

この調査を通じて徳島県下の旧横井戸，旧導水トンネル，石灰洞にはキクガシラコウモリ，ユビナガコウモリが生息し，高知県室戸岬地区の海蝕洞には同じくキクガシラコウモリ，ユビナガコウモリが生息していることが判明した。木内・吉田（1969）によれば徳島県の権現洞（那賀郡木沢村坂州）にコキクガシラコウモリが，桃原第一洞（那賀郡木沢村高野）にキクガシラコウモリが生息する。木内らの調査から約30年を経過しているが，なんとかそれらのコウモリの生息洞近辺の自然がそのまま残され，今尚，多くのコウモリが安泰であることを祈る。

本調査に際して御協力下さった木内盛郷，酒井雅博，生口博則（広島大学理学部教授）及び木原疆（岡山県矢掛町国民健康保険病院医師）の諸氏に厚く御礼申し上げる。

引 用 文 献

愛媛大学洞穴研究グループ．1972．洞穴学草稿．122 pp. 愛媛大学，松山．

木内盛郷・吉田正隆．1969．徳島県の洞窟動物相．徳島県博物館紀要．1：41–63.

Sawada, I. 1982. Helminth fauna of bats in Japan XXV. Annot. zool. japon. 55：26–31.